

ネパール紀行 2023



2023年7月

旅のチカラ研究所 植木圭二

旅行会社のパッケージツアーでヒマラヤ山脈の麓にあるネパールに行ってきた。ツアー参加人数は私たち夫婦を含めて8人、日本からの添乗員は同行せず、現地ガイドが全てを取り仕切ってくれた。



第一章 ヒマラヤ山脈

■エベレスト遊覧飛行

私たちは夜遅くネパールの首都カトマンズに着いた。しかし翌朝4時にはモーニングコールが鳴り、5時にはバスでホテルを出発する。早起きの理由はエベレスト遊覧飛行に乗るため、このような強行軍は久しぶりになる。しかしそれがまた、海外旅行にやって来たという実感が湧いてくるから面白い。バスが向かっているのは昨夜降り立った空港だ。

私たちが乗るエベレスト遊覧飛行は **Buddha Air** という航空会社が運航させており、この社名はいかにもブッダ（仏陀）が生まれた国ならではのものだ。

仏教の開祖ブッダはネパール南部のルンビニという村で生まれた。しかしインドで生まれたと思っている人も意外に多い。かく言う私もここに来るまでルンビニはインドだと思っていた。

空港ターミナルで今回のツアーの現地ガイドのラズさんからチケットをもらい搭乗手続きを行う。手続きはチケットを搭乗券に換えるだけだが、ラズさんは中に入れないと言っている。そうすると今回のツアーには添乗員がいないので自分たちでやらないといけない。ツアー客の中に私より少し年上の夫婦がいて、その旦那が手続きをしてくれる。彼は海外青年協力隊関係の仕事をしていたと言っていたので海外事情に明るい。さすがにネパールまで来る人は旅の強者（つわもの）が多い。

私たちの乗る飛行機は 6 時 15 分発で、搭乗するまで多少の時間がある。

偶然にも日本人のような若いキュートな女性と目が合い、私が「日本人ですか？」と話しかけると、流暢な日本語で「いいえ、ベトナム人ですが、日本に住んでいます」と答えてくれる。

彼女の名前はタオスさん、日本に住むベトナム人でネパールには仕事で来て、明日日本に帰るのでエベレストを見に来たという。彼女は日本でベトナムの実習生を受け入れる仕事をしており、今回はネパールまで実習生の募集範囲を広げるためにやって来たと話してくれる。

昨今は東南アジア諸国の賃金が上がり日本との差がなくなってきたので募集をネパールまで広げざるを得ない状況になっており、改めて日本の国力低下を感じてしまう。

搭乗時間が少し遅れており、他のツアー客も、自分たちの娘の年齢より若いアイドルのような彼女といろいろと話をする。彼女はヨーロッパに行きたい気持ちが強いが、ベトナムのパスポートではヨーロッパは敷居が高く、日本のパスポートが羨ましいと言っている。

日本のパスポートの信用度は世界トップクラスで、それを持っていけば世界 191 の国と地域にビザなしで渡航できる。しかし残念ながらそのことを多くの日本国民はあまり分かっていない。信用を築き上げてきた先人たちに感謝し、パスポートをもっと活用すべきだと改めて感じる。

ただしその日本のパスポートでも、ここネパールは事前にビザの取得が必要だった。

飛行機に搭乗する。飛行機は 50 人乗りのプロペラ機で、真ん中の通路を挟んで左右に 2 列ずつ席があるが、通路側の席は予約を取っておらず窓側だけに人が座るようになっている。このことからエベレスト遊覧飛行にかけている会社の意気込みを感じる。いやネパールという国がエベレストという絶対的な観光資源に賭ける思いなのだろう。



【エベレスト遊覧飛行の飛行機】

定刻を過ぎているのに飛行機は飛び立たない。しばらくして CA（客室乗務員）からのアナウンスが入る。「現在、私たちの前に飛び立った飛行機からの情報を待っていますから、もう少しお待ちください」と言っている。

さらに 10 分程経って、CA が「誠に申し訳ありません、本日は霧で視界不良のため本機は欠航します」とさらりと言ってくる。

私たちは飛ばない飛行機から降りて、出口に行く。するとガイドのラズさんが待っていて開口一番「残念でしたね、でもまた明日があります」と言って本日のチケットを払い戻し、明日の予約をとってくれた。

「それにしても天気は決して悪くはないのに飛ばないとは、・・・」と私がラズさんに言うと、彼は「山の天気は、地上とは全く違うので行って見ないと分からないのですよ、何しろ雲の上のことですから」と答えてくれる。

“雲の上のこと”とは、あの世のことか、あるいは手が届かない世界のことを意味する言葉だが、彼がそれを知って口にしたとはとても思えない。言葉とはこうして生まれるものなのかと、興味深く受け取った。

■再度の挑戦

翌日、再び 4 時に起きて 5 時 30 分に空港にやってくる。

昨日知り合ったタオスさんも来ている。彼女は本日夜の便で帰国すると言っていたので朝の遊覧飛行は大丈夫らしい。

昨日と違って雲の切れ間から山が見える。何となく本日は行けそうな気がしてくる。他のツアー客も同様な感触らしい。

「これなら飛びそうですね」と言っているのは今回の参加メンバーで一番若い金髪の若者だ。彼とは昨日の帰りにも話をしたが、80 カ国以上旅行をしているというからとんでもない海外旅行マニアだ。私たち夫婦がネパールを入れて 63 カ国なので、私はその数字には相当ショックを受けた。実は私は自分より多くの国を旅行してきた人にあまり会ったことがない。それでも何人かはいたが、その人たちは全て私よりも年上だった。しかしこの彼は年下、それも 30 代に見える。こんな人がこのツアーに参加している。

昨日と同じ手順で、飛行機に乗り込む。昨日と同じようなプロペラ機だが、本日の飛行機は昨日のものよりもひと回り大きい。昨日中止になったので予約人数が増えたのだろう。

昨日はこのまま待たされたが、本日はすぐにプロペラが回り始める。飛行機に乗ってプロペラが回るというのは至って当たり前のことだが、このことに私も他のツアー客も興奮している。

今回のツアーに 1 人で参加している気の良さそうな静岡から来たというおじさんは「プロペラが回るのが、こんなにもありがたいと思わなかったよ」と言っている。この静岡おじさんもなかなか旅行好きで、次はエジプトに行くと言っている。

いよいよ離陸する。高度を上げて直ぐ下にはカトマンズの市街地が見えてくる。やがて雲の中に入り街並みは見えなくなる。

そして雲を突き出て飛行機は雲の上に出る。

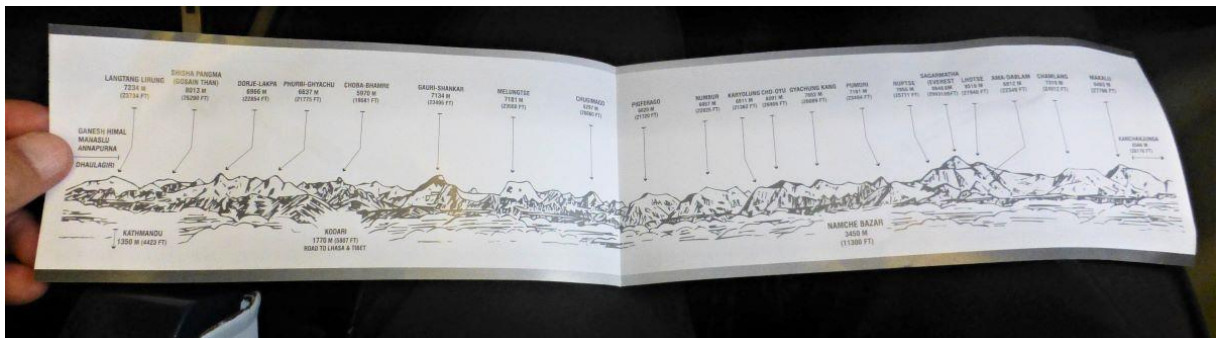
天気は良い。雲海が続き、その遙か彼方に山が見えてくる。山は雲海の上に突き出ているので、海に浮かぶ島のようにも見える。雲海とは良く言ったもので、実の的を射ている表現に私は感激してしまう。いや表現にも感激するが、現実に見えている見事な雲海に感激している。



【雲海とヒマラヤ山脈の山々】

雲海に浮かぶ島、いや島ではなく山に徐々に近づいてくる。それにつれて山の姿も鮮明になってくる。

CAが私の席の方に近づいてきて「That is LANGTANG LIRUNG」と言って、先ほど渡されたパンフレットの一番左の山を指差している。パンフレットにはその山の標高は7234mと書かれている。



【搭乗時にもらうヒマラヤ山脈のパンフレット】

雲海の上に頭を出している山々は続いている。前方からは次々に高い山が見えて、そして後方に移動していく。

またCAがやってきて「That is SGARMATHA (あれがサガルマータ)」と言って遠い前方の山を指先している。私はその言葉を受けて「EVEREST (エベレスト)？」と聞くと、彼女は右手の親指を立てて「Yes」と答えた。

世界最高峰 8848m の山の英語名はエベレスト、現地のネパールではサガルマータ、反対側のチベットではチョモランマと呼ばれている。

そのエベレストが近づいてくる。雲海の上に頭を出している山はいくつもあるが、他の山より頭ひとつ高く、何よりもかっこいい。その姿にはある種の威厳を感じる。

おそらく雲海の高さは 6000m くらいで、ここに見えているのは 7000m 級、8000m 級の山々だけになっている。エベレストは雲海の上に 3000m くらい出ていることになる。そう思うと富士山の 3776m はこの雲海の遥か下で、世界の屋根と言われるヒマラヤ山脈はやはり凄い。



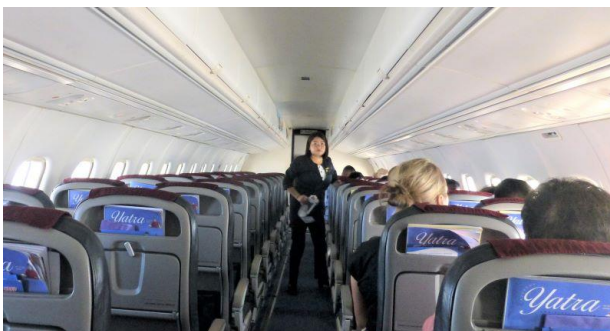
【最も高い山がエベレスト】

しばらくして飛行機は大きく旋回して U ターンする。今までは左側の窓からヒマラヤ山脈が見えていたが、今度は右側の窓の乗客が見る番になる。しかし U ターン後の機内は全員が右側の座席に移っており、誰も左側の席に座っていない。

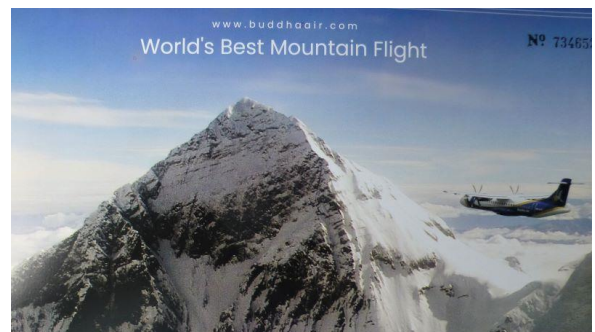
私は飛行機の安定が保たれるのか心配になる。

ペルーのナスカの地上絵の遊覧飛行では、乗客全員の体重を測って左右均等になるよう座席を指定されたが、こんな状態でも事故が起きないのはブッダが守ってくれるのだろうか。

そんな心配をよそに飛行機は空港に戻ってくる。降りる時に CA がニコッと笑いながらエベレスト遊覧飛行のフライト証明書を手渡してくれた。



【全員が右の座席に移動 真ん中は CA】



【フライト証明書】

■山が財産

ネパールという国の財産は何といっても山だろう。

エベレストを筆頭に世界で 8000m を超える山は 14 座しかない。そしてこのうちの 8 座がネパールにある。

私たちが泊まっているナガルコットのホテルは首都カトマンズの東約 20km、標高 2000m 以上の高地にある。

従って標高 1300m のカトマンズの街並みを上から眺めることができ、美しい朝日と夕日を楽しめる。もちろんヒマラヤ山脈もエベレストも見ることができるが、残念ながら今日は雲がかかっている。



【ホテルの屋上からの眺望】

ナガルコット一帯はリゾートホテルも多く、ここに滞在してゆっくりヒマラヤ山脈の雄大さと田舎の静けさを楽しむというのが観光の定番になっているようだ。



【測量塔】

Nagarkot Geodic Survey Tower にやって来る。日本語に訳すとナガルコット測量塔で、観光用ではなく測量するために作ったらしく、鉄骨で組んだ高さ 15m くらいの塔がある。

定期的に係員がこの塔に登って山の視界を観測しているのだろうか。日本ならばカメラを設置して遠隔監視をするところだが、ここネパールはそういう発想がないらしい。

いや良く見るとここには電気がきていない。

地元の人が登っているなので、私と静岡おじさんも登るが、雲で何も見ることはできなかった。

カトマンズの西にチャンドラギリという標高 2550m の山がある。最近完成したロープウェイに乗って山頂にやってくる。山頂にはヒンズー教の寺院があり、晴れていれば周囲の山々、そしてエベレストも見ることができるとうたい文句になっているが、本日の眺望は今ひとつだ。

山頂にある展望レストランで昼食になるが、曇り空は霧に変わり、そして雨になる。



【チャンドラギリのロープウェイからの眺望】

ラズさんによると、今は雨季で特に7月と8月は雨が多い。ネパール観光のベストシーズンは10月、11月、3月、4月で、真冬は空気が澄んで山は綺麗に見えるが、寒いと言っていた。

第二章 カトマンズの谷

■世界遺産

カトマンズ一帯はヒマラヤ山脈の麓の盆地で、この盆地が「カトマンズの谷」という名称で1979年にユネスコの世界遺産に登録された。

今では世界遺産は珍しくないが、私は1979年登録に驚いている。なぜかと言うと世界遺産の登録はその前年の1978年は始まったからで、それほどまでにこの地域の文化的価値が昔から高く評価されていたことになる。ちなみに日本の世界遺産登録は1993年から始まった。

カトマンズの谷は直径約20kmの範囲だが、谷の全てが世界遺産ということではなく、寺院など7つの構成資産によって登録された。その他に約900の歴史的建造物がある。ただし2015年の大地震で甚大な被害を被って未だに修復中のものが多い。

カトマンズの谷には先住民のネワル族が住んでいて、4世紀にはネパール王国が成立した。そして13世紀頃からマッラ王族が台頭して、その後3つの王国に分裂した。18世紀にゴルカ王が3つの王国を統一してカトマンズを首都と定めた。

現在はそれらの王国を受け継ぐ形でカトマンズ、バクタプル、パタンという3都市がある。

■ダルバール広場

世界遺産「カトマンズのダルバール広場」にやって来る。旧王宮や寺院があり、観光名所というよりも市民の憩いの場になっているように見える。



【カトマンズのダルバール広場】

ダルバール広場はカトマンズだけではなく、3 つあった王国全てにダルバール広場があるとラズさんが説明してくれる。

それを聞いて私は南米のペルーでも同様なことがあったことを思い出した。ペルーのクスコやリマには必ずアルマス広場がある。アルマスはスペイン語で武器という意味で、スペイン人は征服者の象徴として武器をかかげてペルーの至るところにアルマス広場を造った。

では、ネパールのダルバール広場はどうか。

ダルバールというのはネパール語で王宮を意味している。よってダルバール広場は王宮広場ということになり、3つの王国にダルバール広場がそれぞれあるのは当然で、3つの王国は栄華を競い合い、それぞれの国に芸術性の高い建物が建造された。やはりライバルの存在は大きい。

カトマンズのダルバール広場の一角に「クマリの館」という怪しげな建物がある。

入口から中に入るといきなり中庭になり、中庭に面して窓があって窓枠には見事な木彫りの装飾が施されている。ここに女神クマリの化身とされる少女が住んでいるとラズさんが言っている。

ラズさんはその少女の写真は絶対撮らないようにと言って、彼が合図をすると3階正面の窓からその少女が現れる。まだ幼い女神の化身だが、参拝者たちは彼女を拝んで、お布施を箱に入れている。



【クマリの館の中庭から見た建物 3階中央の窓から女神クマリの化身が顔を見せる】

私は観光目的の興行かと思ったが、詳しい説明を聞くと歴史ある信仰だと分かる。クマリ信仰は昔からネパール各地であったが、現在はこのクマリの館だけになっているという。

クマリに選ばれた少女は3～5歳で親元を離れ、この館で暮らし始める。学校に行かず、年に数度の祭り以外は館の外に出ることがない。クマリはサンスクリット語で処女を意味し、少女は初潮を迎えると身体に宿る聖性が失われるとされ、その時に次の少女と交代する。

クマリを見ると幸せになれると言われており、館の前にはいつも人だかりができています。

世界遺産「バクタプルのダルバール広場」にやって来る。バクタプルは古都として美しい街で、旧王宮や寺院は中世の雰囲気の色濃く残している。旧王宮には大きな沐浴場があり、今は朽ち果てているが、当時の栄華が想像できる。

この街はヨーグルトが名物ということで、ラズさんは街角の小さな店のヨーグルトを勧められる。50ルピーとのことで日本円では55円、冷たくて美味しかった。



【バクタプルのダルバール広場の寺院】



【王宮の沐浴場】

世界遺産の「パタンのダルバール広場」は、3つの都市の中でも私が最も気に入ったダンパール広場で、ラズさんも私と同じ意見らしくこの広場を絶賛している。旧王宮には見事な中庭が3つある。そのうちの1つに沐浴場があり、バクタプルの沐浴場よりも小ぢんまりしているが、装飾はこちらの方が見事だ。

パタンは住民の8割が仏教徒とのことで、ネパール全体ではヒンズー教徒が8割を占めていると聞いていたのでこの街はそれが逆転している。



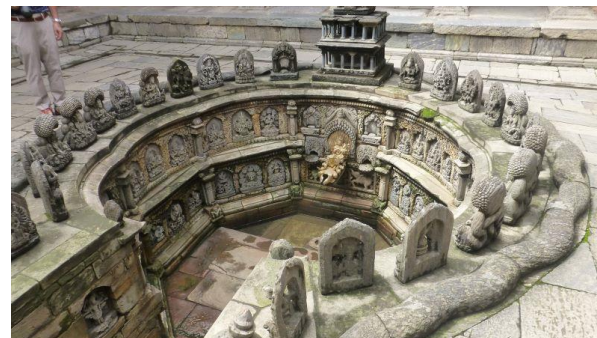
【パタンのダンパール広場の寺院】



【旧王宮の入口の見事な彫刻】



【旧王宮の中庭】



【中庭の沐浴場】

■ヒンズー教と仏教の共存

カトマンズの谷はヒンズー教と仏教が共存している。世界遺産検定のテキストでは融合していると書かれている。ここはチベットとインドを結ぶ交易の中継点だから、チベット仏教とインドのヒンズー教が混在しても不思議ではない。混在してもパレスチナのように対立していない。

パレスチナでは、ユダヤ教とキリスト教とイスラム教が昔から対立している。その理由はこの3宗教ともに創造主の神は同一のものだが、キリストやムハンマドといった預言者が異なる。そのため教義も異なり自分たちが絶対に正しいと譲らない。

ちなみに預言者と予言者は違う。預言者は神の言葉を預かった者で神の使いだが、予言者は未来を予言する者のことで神とは関係ない。

話をヒンズー教と仏教の話に戻すと、ヒンズー教は多神教で多くの神がいる。中でもシヴァ神は有名で、像の顔をもつ神ガネーシャも人気がある。猿の顔を持つ神もいて神は無限にいるとも言われている。つまりどんな神も受け入れる土壌がある。

一方で仏教には神はいない。釈迦族の王子だったガウタマ・シッダールタが悟りを開き、その教えが経典になった。サンスクリット語で目覚めた人のことをブッダ（仏陀）といい、仏教と呼ばれるようになった。神ではなく人間の教えだから哲学と言えなくもない。

従ってこの2つの宗教は対立する要素がなく、むしろ人々の生活においては融合していると言ってもいいのかも知れない。

■ヒンズー教と仏教の寺

世界遺産のひとつヒンズー教の「チャングナラヤン寺院」にやって来る。先住民のネワル族が4世紀に建てたネパールで最も古いヒンドゥー教寺院になる。カトマンズから少し離れた山の上であり、観光客があまり来ないのでゆっくりと参拝できる。

私たちが寺院へと続く階段を登っていると、30人くらいの地元の女性たちも登って来る。彼女たちは派手なサリーを身に着けている。ヒンズー教徒は色彩豊か、それも赤は美の象徴というから赤を基調にしたサリーが多い。

境内で彼女たちが踊り始める。すると静岡おじさんがそれに加わり、他のツアー客も次々に加わる。そして踊りが終わり最後は記念撮影を一緒にする。小さいながらも国際親善、仏教徒とヒンズー教徒の異教徒交流になった。



【チャングナラヤン寺院】



【参拝に来た女性信者たち】

カトマンズの西約 2km のところに世界遺産の仏教寺院「スワヤンブナート」が小高い山の頂上にあり、とても景色が良い。カトマンズの谷は数千年前までは湖で、この寺はその当時から山の上に建っていたとラズさんが教えてくれる。

私はそれを聞いてちょっと不思議に思った。ブッダの生誕は一説では紀元前 463 年 4 月 8 日と言われており、数千年とは、一般的には 3~5 千年くらいなので開祖のブッダが生まれる前になる。そんな昔から本当にここに寺があったならば、仏教以外の寺だったはずだ。

そうだとすればヒンズー教の寺だったのだろう。ヒンズー教はいろいろな精神文化の寄せ集めの宗教で、開祖も分からない。その起源は 5 千年以上前とも言われている。

この寺は仏教の本質を表現しているとガイドブックに書かれている。金色に輝くストゥーパ(仏塔)が中心にあり、ネパールの写真でよく見かけるブッダアイ(仏陀の目)が施されている。特徴的なその目は、片目が“情け”、片目が“知恵”だとラズさんが教えてくれる。

仏教の本質は情けと知恵なのか、私は妙に納得してしまう。確かにそれは世の中を生きていく本質かもしれない。



【ストゥーパ 中央にブッダアイが描かれている】

マニ車がストゥーパを取り巻くように配置されている。マニ車とは経典を収納した回転する筒で、ラズさんはストゥーパの周りを時計回りに歩きマニ車を時計回りに回すことが参拝の作法だと説明して実演してくれる。

日本でも反時計回りを“じゃんぼん回り”と呼び、葬式の時だけ行う風習があり、それ以外は時計回りが正当なので、ルーツは同じなのだろう。



【マニ車】

第三章 暮らしと食事

■喧噪の街

ネパールの街では自動車とオートバイ、そして歩行者が狭い道も広い道も縦横無尽に行き来しており、まさしく喧騒の世界になっている。私たちのバスの周りは自動車とオートバイで埋め尽くされ、そこに歩行者が横断するというシーンが多い。これでよく交通事故を起こさないのかと不思議に思うほどだ。

乗り合いバスは相当年代物が走っている。私たちが乗っているバスにはエアコンがついているが、乗り合いバスはもちろんのこと乗用車やタクシーは窓を開けており、エアコンがない。

信号機はほとんど見かけない。信号機の代わりにヨーロッパに多いロータリー交差点を見かけるが、それもそんなに多くはない。主要な交差点は警察官が手信号と笛で交通整理をしている。



【喧噪の世界 どちらの写真にも青い服を着た警察官が交通整理をしている】

そういえばホテルで何度か停電を経験した。短時間で復旧したが、どのホテルの部屋にもマッチとローソクが備え付けてあるところを見ると、長く停電することもあるのだろう。そうになると信号機はむしろ危険になる。

電気が安定に供給される日本人にとっては、ネパールは遅れていると思うのは簡単だが、文明の利器がなくなっても暮らしていけるたくましさを感じる。

■田舎の暮らし

ラズさんが田舎の集落を案内してくれる。ちょうど祭の前なので、祭で使うラクシーという酒を造っている。米やシコクビエ（アワやヒエの仲間でイネ科雑穀）を発酵させた酒を樽に入れて下から焚火で熱して蒸留酒を造っている。

山羊やニワトリを飼っている。といっても檻に入れることや柵で分離していないので一緒に住んでいると言った方が正しいかもしれない。

家の前には5色の旗が掲げられてチベット仏教の経典が旗に書かれている。宗教との関わり方も現代日本とはだいぶ違う。

この生活ぶりを見て、「日本も昔はこうだった」と、ツアー客の誰かが言っていた。



【酒（ラクシー）の蒸留】



【山羊との共存】

■食事

今回のツアーでは食事の半分くらいはホテルのレストランで食べる。ホテルは前半がカトマンズの市街地の便利な場所に、後半がカトマンズ郊外の山の上のナゴルコットというリゾート地にある。どちらもネパールでは高級リゾートホテルで雰囲気はかなり良い。

特にナゴルコットのホテルは大きなドーム状のレストランで、ドームの 1/3 くらいは半地下のプールになっている。プールを上から眺めて食事がとれるという珍しい構造になっている。

そんなレストランなので地元の人々が食べる料理とは多少かけ離れているかもしれないが、料理はダルと呼ばれる豆スープ、カレー、ライスが基本で、大きな丸い皿の中央にライスが盛られ、小さな器に料理が入っている。カレーは何種類も出てくるが、そんなに辛くはない。香辛料もきつくないので日本人にも比較的受け入れやすい。



【ナゴルコットのホテルのレストラン】



【代表的なネパール料理】

「ヒマラヤ蕎麦処」で昼食になる。ヒマラヤ蕎麦とは一体何かと思っていたら、普通の日本の蕎麦だ。聞けばこの店は 1996 年の約 1 年間、長野の戸隠で蕎麦打ちの修行をした青年の技術を受け継いでいる。だから味付けや作り方は日本流、蕎麦だけはネパール産で、標高 2600m 店主の出身地のツクチェ村で採れたものを使用している。もちろん蕎麦湯も出てくる。



【ヒマラヤ蕎麦処の蕎麦定食】

最終日は最後の晩餐ということで食事と一緒に民族舞踊を見せてくれる店に案内される。

田舎の集落を訪れた時に造っていたラクシーという酒が出てくる。材料からすれば米焼酎に近い味だが、アルコール度数が高く、かなりきつい。まるでウオッカのようだ。

民族舞踊の最後に黒い牛の舞になる。それは日本の獅子舞が黒い牛になったようなものだが、踊った後に牛がチップを要求してくる。ヒンズー教では牛は神聖な動物なので、これは断り切れない。お客たちはチップを牛の口に入れ、牛の口の奥から手が伸びてチップを回収する様子が面白かった。



【民族舞踊】



【牛の舞の後のチップの要求】

第四章 旅の前後

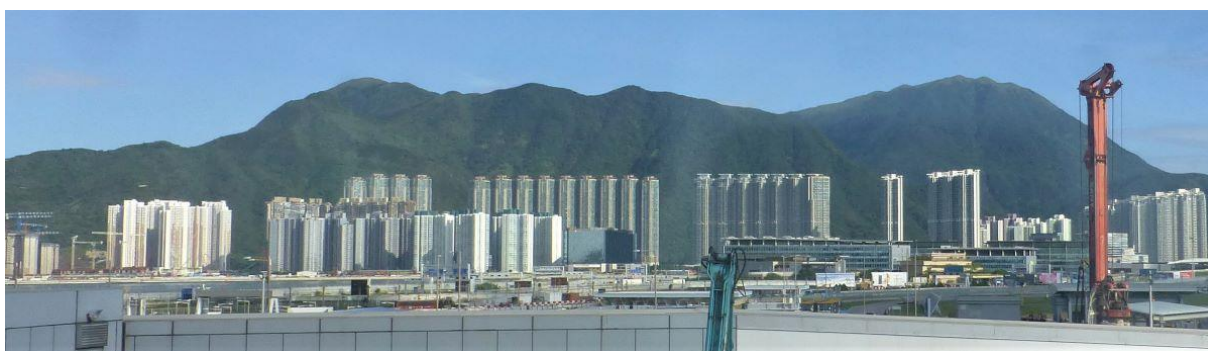
■空港で驚いたこと

行き帰りの空港で驚いたことが2つある。

まずは乗り継ぎに使った香港空港だ。ここは巨大なハブ空港で、その大きさや設備に香港そして中国の勢を感じる。信じられないことさらに拡張しようと工事をしている。

私は国内でも海外でも、その地域の経済発展のパロメーターとして建設工事を見るようにしている。この空港の工事を見て、香港のさらなる経済発展を感じ、それは疑いの余地もない。

空港の外に目を向けるとタワーマンションが林立している。経済発展の速度とスケールで、もはや日本と比較するレベルではない。



【香港空港から見たタワーマンション群】

もう一つの驚きは、カトマンズの空港だ。それは到着した時ではなく、帰国する時だ。

旅行中に私がガイドのラズさんにネパールの主要産業を聞いたら、彼は「農業、観光、そして出稼ぎですね」と答えた。

その出稼ぎに行くために多くの人たちが空港に来ており、それを見送る人々がその何倍もいるので空港の入口は人で溢れている。出稼ぎに行く夫を見送る幼い子供を連れた妻がいて、妻子だけでなく親戚縁者も集まっている。幼い子供連れの出国者も多いから、家族で出稼ぎか、いや移住かも知れない。

日本人も昔は海外に出稼ぎに行っていた。一家全員の移住も多かった。当然私が生まれる前のことなので古いニュース映像で見ただけだが、この空港の光景を見ているとどうしてもその時代の日本に重ねてしまう。そして気が付いたら、私は「頑張れよ」と声を掛けていた。



【夜のカトマンズの空港ターミナルビルの入口付近】

■なぜ、ネパールへ

今回のネパール旅行は、本当はブータン旅行のはずだった。

それは私の友人が昨年から仕事でブータンに行っており、遊びに来ないかと誘われていた。私と妻はこんな機会でもないとブータンには行けないだろうと、ブータン旅行を考えていた。

そして東京のブータン政府指定の旅行会社に行き、ブータン旅行について話を聞いた。

担当者の説明によれば、ブータンは旅行者の受け入れを政府が管理しており、そのため税金が1人1泊当たり200USD（米ドル）かかり、その他に旅行費用が別途必要になる。旅行費用には宿泊費、国内交通費、食費、ガイド費用などが含まれているから基本的にはそれだけで済むのだが、それがおおよそ200USDという。政府指定の旅行会社での手配が必須で、友人宅に泊めてもらうのは無理らしい。従って1人1泊400USD、円安の進む現在では約6万円になる。

その他に東京からブータンまでの往復航空券が約25万円、夫婦2人でブータンに4泊するだけで100万円という計算になる。

私と妻は費用の面でブータン行きを躊躇していると、5泊6日139800円のネパール旅行のパンフレットが目にとまった。私にとっても妻にとってもネパールもブータンも似たようなイメージしか持っておらず、友人には悪いがブータンをネパールに変更した。

実際にはオプションのエベレスト遊覧飛行やサーチャージなどを加えると 20 万円を超えるが、それでもブータンの比ではない。さらにブータンには世界遺産はないが、ネパールには有名な世界遺産「カトマンズの谷」があるのも魅力的だった。

■旅の記録

実施は 2023 年 7 月 21 日（金）～7 月 26 日（水）の 5 泊 6 日（機内泊 1 泊含む）、その行程を示す。

- ・ 1 日目 10 時 40 分成田空港発のキャセイパシフィック便で 14 時 40 分香港着、19 時 35 分香港発、22 時 10 分カトマンズのトリブバン国際空港の到着（全て現地時間表示、所用時間は東京-香港約 5 時間、香港カトマンズ約 4 時間 50 分）空港よりチャーターバスで移動し、24 時「ゴカルナ・フォーレスト・リゾート」にチェックイン、以降は同じバスで移動になる
- ・ 2 日目 4 時にモーニングコール、5 時ホテル出発、6 時 15 分エベレスト遊覧飛行の飛行機に搭乗するが、天候不良で飛び立たずホテルに戻り朝食
10 時ホテル出発、11 時カトマンズのダルバール広場を散策、クマリの館を見物、市中のレストランで昼食、小高い丘に建つスワヤンブナートの仏教寺院参拝、16 時ホテルに戻る
- ・ 3 日目 4 時にモーニングコール、5 時ホテル出発、6 時 15 分エベレスト遊覧飛行離陸約 1 時間のフライトの後ホテルにも戻り朝食、10 時ホテル出発、チャンドラギリの丘のヒンズー教寺院を参拝、展望レストランで昼食
昼食の間は大雨、下山してバクタブルのダルバール広場へ
ニヤタポラ寺院、ダッタトラヤ寺院、市場を散策しナガルコットへ移動
17 時 30 分「クラブ ヒマラヤ ナガルコット リゾート」にチェックイン
ホテルにて夕食
- ・ 4 日目 朝から曇りでホテルからの眺望は良くない、9 時 30 分ホテルを出発
チャングラナラヤン寺院を参拝、参拝に来ていた地元の女性たちと交流
田舎の集落に立ち寄り、酒（ラクシー）造りや生活ぶりを見物、
ホテルに戻り昼食にコンチネンタルランチ、部屋で休む
17 時 30 分ホテルを出てバスでマハデオポカ山頂、展望台に登るが眺望なし
18 時 30 分ホテルに戻り、ホテルのレストランで夕食
- ・ 5 日目 朝から雨でホテルからの眺望なし、11 時ホテル出発しパタンに移動
13 時パタンの「ヒマラヤ蕎麦処」で昼食、パタンのダルバール広場を散策、
旧王宮、ゴールデン寺院、日本人の土産物屋「ネパール ガネーシャ」で買い物
旅行者の集まるタメル地区を散策、レストラン「ゴカルナ ハウス」で民族舞踊を
見ながら夕食、トリブバン国際空港に向かい、
23 時 20 分カトマンズ発の飛行機が 1 時間 30 分遅れで離陸
- ・ 6 日目 香港で乗り継ぎ、14 時 30 分に成田空港着

2 人の総額は約 476040 円、1 人当たりでは約 238000 円になった

- ・ 阪急交通社への払い込み（2人分）443540円、内訳は以下に示す
 - 基本旅費 139800円/人、
 - エベレスト遊覧飛行 35000円/人、
 - サーチャージ税金など 46970円/人
- ・ 国内交通費（2人分） 約12500円
- ・ 土産と夕食時の飲み物（2人分） 約20000円